

## 史上最年 関 (下)

平凡な剛を望んだが み大方、庄内弁で答えた。

花)の鶴の一声もあって柏 960) 年名古屋場所。東 り思っていた。昭和35(1 われると「んだのー」「ん かつゑは驚いた。当時52歳。 7月12日だった。旧櫛引村 戸の大関昇進が決まった。 関脇で11勝にとどまったが、 敗戦でお預けになるとばか 関になるとは心底想定外だ でね」など、時には考え込 次男である息子のことを問 報道陣に7人きょうだいの から名古屋に駆けつけた母 出羽海相談役(元横綱常の った。昇進問題も千秋楽の まさか我が子が21歳で大 勤めにでも出て、早くお嫁 とつしたことがないし、気 凡な剛を望んでいました。 親の手を離れて厳しく苦し の優しい、おとなしい子で らない息子だった。病気ひ つもりで東京に出したのに さんをもらってという、平 です。私は剛に学校を出て、 られるか心配だったし、家 ことは私は大反対でした。 ころもあった。力士になる たことは大嫌い。強情なと す。でもそれでいて曲がっ ですから最初単なる見学の から手放すのが怖かったの いだろう相撲の修業に耐え 「小さい頃から手のかか

> 今は大関になった姿を見て ほしいと願っていました。 持ちで語った。 夢のようです」と感激の面 以上は立派なものになって てしまいました。入門した らいです。でも結局入門し てきた夫と大げんかしたく そのまま置いて山形に戻っ 今後も一生懸命がんばりま りがたくお受けいたします。 と甲山検査役(現審判委員 を聞き付けて近所の人たち 香院だった。昇進の知らせ す」とシンプルに力強く は東関理事(元幕内天城山) が続々集まってきた。使者 元幕内小松山)。柏戸は「あ

> > 岡に到着し、市内を凱旋パ

レード。料亭「新茶屋」で

と朝稽古から観客が続々詰

地元の英雄を一目見よう

シンプルな口上で

古屋市中区梅川町の寺、 伊勢ノ海部屋の宿舎は名 梅 今後の精進を誓った。 ていた。柏戸への地元の期 内で大相撲夏巡業が行われ この頃は毎年のように庄

り上がるのは当然だった。 が決まったから、巡業が盛 待があるからだった。そし て直前の名古屋で大関昇進 7月27日午後8時前に鶴

祝賀会が行われた後、山添 た。同球場は今は鶴岡タウ 深夜まで宴会は続いた。そ の実家に着いた。その後も 行われた巡業会場に直行し して翌朝、鶴岡市営球場で 歳だった。「柏戸来い」の たのが横綱若乃花。 当時32 だが、これに立ちはだかっ 声とともに三番稽古(同じ れ姿を見たい一心だった。 め掛けた。柏戸の強さ、晴

息子・柏戸を名古屋 があっても「土俵の鬼」の 労困憊。いくら21歳の若さ 日酔いもあって新大関は疲 が始まった。歓迎疲れの二 相手と連続して行う稽古) 綱と大関は<br />
こんなにも力の 前では赤子同然のように何 **吳も何度も転がされた。** 「横

大関昇進が成った日。 の宿舎でいたわった母かつゑ

塾大、東北公益文科大の2 ンキャンパスとして慶應義 大学の施設が建っている。 朝稽古から続々入場 ァンは目を丸くするばかり 開きがあるのだ」と地元フ け、また盛り上がったとい いがある」と横綱昇進に向 だった。だが「応援のしが

## 横綱との違い知る

うから故郷はありがたい。

た。 どだった」とため息をつい 綱は強い。目まいがするほ とっていい稽古だったろ ントを残した。柏戸は「横 う」と若乃花は余裕のコメ 20番の稽古の後「柏戸に

|一敬称略||(富樫 深まった大関昇進だった。 存在として、柏戸の自覚も だ大相撲の屋台骨を支える 疲労もあった日だった。た 地元凱旋は喜びとともに 嘉美

柏戸の昇進 いが加味された。

て4場所連続三賞受賞の勢 綱・大関全員と対戦。加え

準には3勝及ばないが、 3場所33勝以上」の今の基 勝・10勝・11勝) で「三役 門系統別対戦制度の中、 前3場所の合計は30勝(9 ◆昇進メモ 横 毎週火曜日付に掲載